魔王の娘(姫)に惚れた勇者

無音理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王の娘（姫）に惚れた勇者

【Ｎコード】
Ｎ００３４Ｑ

【作者名】
無音理

【あらすじ】
異世界に召還された高校生。
魔物を倒し、仲間を作り、更に魔物を倒し…。
気付けばチート的な力を手に入れていた。
召還された時の称号は勇者。
勇者のやる事と言ったら一つしかない。
いざ魔王に戦いを挑んだら簡単に勝ててしまう。
とどめをさそうとしたその時に……。

プロローグ（前書き）

初めての小説投稿なので、お手柔らかにおねがいします。

プロローグ

「魔王、覚悟！！」
「ぐぅ…このような小童に…」

目の前には、ズタボロになった魔王が倒れている。
自分自身には傷一つ付いていない。
異世界に召還されてから約一年半、勇者として魔物と戦ってきた。
経験値を稼ぎ、レベルＵＰを繰り返し、仲間の剣士、魔女、賢者は、
この世界のレベルでは最大の９９になった。
自分自身は異世界から来たからか、勇者だからかは分からないが、
レベル２５６になってもまだ成長の余地がある。
そんなチートな自分には殆どダメージは、入らない。

一歩前に歩み寄る。

「ま…まて、われの物にならぬか、世界の半分をくれてやろう」

某ゲームのボスみたいな事言ってやがる。
って言うかそれは戦う前に言うものだろう。

「断る！！」

キッパリと断った。
こんな悪い奴に従うなんてまっぴらごめんだ。

自分はいよいよとどめをさそうと刀を振り上げる。
そしてそれを振りおろそうとしたとき、小さな少女が自分と魔王の
間に入り込んできた。

勇者は恋に落ちた。

一目惚れだった。

プロローグ（後書き）

次から話が進んで行きます。
拙い文章力ですいませんが、次も見てやって下さい。
よろしくお願いします。

第一話「お姫様だっこと転移魔法（ルーラ）」（前書き）

読んでくれて有り難うございます。

第一話「お姫様だっこと転移魔法（ルーラ）」

「お、お父様を殺さないで…」

両手を広げてかばう女の子。
おそらく魔王の娘（姫）だろう。
１３歳位で身長が１３０センチもなさそうだ。
瞳は魔族特有の物で、人間で言う白眼の部分が黒く、黒目の部分が暗めの黄色だ。
この瞳で睨まれたりしたら怖いだろうが、今はうっすらと涙をためているので一切怖くない。
むしろかわいい。
肌は何処までも白く透き通るようで、逆に髪の毛は何処までも黒く、ロングに伸ばしている。
きているものは俗に言うゴスロリであり黒をベースに白いフリルが付いている。
かわいい。
背中ではコウモリの羽に似ている羽がハタハタと動いている。
かわ…。
それがプルプルアワアワしているのである。
かわいすぎるだろおおぉおおぉおおぉおおぉおおおお！！

「君は誰なんだい？」

一応聞いてみる。

「お、お父…魔王様のむ、娘でしゅ…す」

噛みまくりだ。

そして自分の推測が正しかった事が分かった。

「そうか…」
「……」
「なあ、魔王よ」
「な、なんだ」
「今から言う事を約束するのなら見逃してやろう」
「な…」
「ちょ…勇者」
「なにいって…」
「勇者…」

魔王と仲間の賢者、剣士、魔法使い、全員に驚かれる。
それはそうだ。
世界の半分でも魔王を倒すという所はゆるがなかったからだ。

「3つある」
「……」
「1つ、もう2度と人間を襲わない事」
「わ、わかった、誓おう」
「2つ、今までの被害の責任を人間と双方話し合いの上でとる事」
「しかたあるまい」
「3つ、魔王…いやお父様、娘を自分に下さい」
「よか…って、へ？」
「ほへ…」

場に静寂な空気が流れる。
自分の仲間はもはや自分がなにを言っているのか分からず、固まっている。
と言うか姫よ、「ほへ…」てなんだ、かわいいなぁおい。

固まる一同と訳が分からず首をコテンと傾け、？マーク大量の姫。

「ど、どうなのだ魔王」

やっちまった。
でも、もう後には引けない、引き返す気もない。
地位も名誉も捨ててやる。
ロリコンとでも言えばいい。
認めてやるさ、それくらいで姫を手に入れられるのならな！

〜魔王サイド〜
もはやここまでか、と思いきや勇者の奴め見逃すなどと言いおった。
今から言う事を約束するのならと。
やつの仲間も驚いておるから罠などではなさそうだ。
というか罠にはめる意味がない。
これは、約束するしか助かる道はなさそうだな。

「1つ、もう2度と人間を襲わない事」

これは、仕方ないだろう。
約束せざるおえない。

「わ、わかった、誓おう」

「2つ、今までの被害の責任を人間と双方話し合いの上で公平に決めてとる事」

ほう、これは勇者といったところかの。
普通だったら話し合いもせずに全てを奪われても敗戦国としては文句言えない。
実際われらは人間にたいしてそうしてきたからな。

「よかろう。誓う」

「3つ、魔王…いやお父様、娘を自分に下さい」
「よか…って、へ？」
「ほへ…」

こやつは何を言っておる。
娘も状況が理解出来ておらぬようだ。
魔王であるわしでもそうなのだからしかたないが。

「ど、どうなのだ魔王」

勇者が再度聞いてくる。
これを約束せねばわしは殺される。
と言うか勇者よ、卑怯ではないか？
だがもしこのまま行けば、もしかしたら娘は何処の馬の骨とも分からぬやつと結納させられる恐れもある。
大方人間共の貴族辺りだろう。
ならわしを倒すような力、そして勇者たる心をもちあわせたこ奴に娘を託した方が良いやもしれない。
ここは、こう答えたほうがよいだろう。

「よかろう、娘を勇者、お前にやろう」

「よっしゃぁあぁぁぁぁあ！！」

どうやらよろこんでいるようだ。
まあこ奴に任せておけば、最低限幸せにはなるだろう。

■■■■■■■■■■■■■

「よし、じゃあリネア、転移魔法使えたよな、この事を王に伝えてくれ。
「は、はい。分かりました」
動揺しながらも賢者が答える。

「リカード、レレイ、君たちは魔王の監視とこれからここに来るはずの交渉団の護衛を頼む」
「あ、ああ分かった」
「……了解」

剣士のリカードと魔法使いのレレイがうなずく。
と言うかレレイはさすがに冷静だな、さすが無口っ娘。まあさっきはさすがに驚いていたみたいだが」

「と、言う訳で後よろしくな。俺はしばらく旅に出る」

まあ、勇者が魔王を見逃したら駄目だろう。
ほとぼりが冷めるまで…。

勇者は姫を抱えあげる。
お姫様だっこだ。

「ふぇ？」

更に？を増やす姫。

「じゃ、そう言う事で」

勇者は転移魔法（ルーラ）をとなえて、シュン！！と言う音とともに魔王の間から姿を消した。

後に残った魔王、リネア、リカード、レレイは、そろって呆けたような、顔をしてしばらくその場に立ち尽くした。
魔王はともかくリネア、リカード、レレイは勇者のこのような性格を少しは知っていたが、今回のような事にはさすがに脳が対応しきれなかった。

ちなみにこの後リネア、リカード、レレイは、勇者の残した言葉通りに事を進め、人間の王と魔王の話し合いを無事に進められる体制を作った。
まあ、その話し合いはいつまで続くか分からないし、それはもしかしたら年以上の時間がかかるかもしれないが。

基本的に世界は平和になった。

第一話「お姫様だっこと転移魔法（ルーラ）」（後書き）

そう言えば、主人公（勇者）とヒロイン（姫）の名前がまだ出てなかった…。
次位には出てくると思います。
すいません。

第二話「添い寝と強制単体催眠魔法（スリープ）」（前書き）

すいません遅くなりました。
課題が、課題が悪いのです。
…言い訳ですね。
私の小説を見ていただき有り難うございます。
出来るだけ早く更新していきますのでよろしくお願いします。

第二話「添い寝と強制単体催眠魔法（スリープ）」

シュン！！
この音とともに、周りの景色が一変する。
薄暗く肌寒かった魔王の間から、春になりかけのまだ弱々しいながらされどしっかりと輝く太陽の下に。
目の前には大きくはないものの、白い石で出来たとても綺麗な門がある。
最果ての町、セリアノーズ。
魔王がおさめている魔大陸から最も離れた大陸のさらに最も北にある町である。
景色が綺麗な町と言うキャッチフレーズで観光客を呼び、辺境の町にしてはそこそこ発展している。
中規模程度の町だ。

勇者は姫をゆっくりと地面に立たせる。
さすがにこのまま町に入ると目立ちすぎると判断したからだ。
と言うよりこれ以上姫をお姫様だっこしていたら沸騰するんでないかと言う位真っ赤になっていた。
自分の事が怖いのか、恥ずかしいのか、はたまた状況が理解出来ていないからかは分からないが、「あぅぅぅ～」と言って地面にペタンと座りこむ姫。
かわいさにまただっこしてしまうのを踏みとどまりしばらく待つ事にした。

「大丈夫？」

数分後、自分が尋ねるとコクンとうなずいてゆっくりと立ち上った。
何とか立てるようになった姫の小さな手を引いて、町に入る。

「ようこそ、セリアノーズへようこ…そ？……魔、まま魔ぞヒッ！！」

町の入り口で、それが仕事なのか、他に何かしなくてはいいのかという感じの人が姫をみて顔を真っ青にしている。
この世界には通信機器など一切ない。
だから魔族の影響を最も受けていない。
ここであればエルフやドワーフが普通にいる世界だ、ばれないだろうと思っていたがあてが外れたらしい。
と言うより、ここは人口よりヘタしたら観光客の方が多いので情報も多く入って来ていると言う事を後になって気付く。
どうも自分は少し、いや大いにハイテンションになりすぎていたのかも知れない。
まあ、自分が勇者である事はばれてないみたいだが。

ちなみにこの男の「ヒッ！！」は、魔族を見て発した物ではなく魔お、いや勇者がかなりの黒い雰囲気をはなち、睨むことでだまらせた事によるものだ。

男の前を素通りすると、一番近くの宿に入る。
この町は何回か来た事がある。
入口に近い所から高級な宿があり、奥に進むにつれて、それなりになっていく。

「ようk…ようこそいらっしゃいました。一晩二名様で、金貨二枚です」

さすがは商売人、少し姫を見てひきつったが営業スマイルを崩さずに必要な事だけを言って来る。

しかし、さっきの男も受付の女性も何が怖いのだろうか、こんなに可愛いのに…。

「三日位止まる。余ったら好きなようにするといい」

と言いながら、精霊貨（一枚で金貨十枚の価値がある）を一枚わたす。

「かしこまりました。お部屋は二部屋にしますか？それとも一部屋ですか？」

さすがにまだ一つの部屋に泊まるわけにはいかないだろう。
一つの部屋に泊まったとしてもなにをするわけでもないが。

「二部屋でお願「え！」…ん？」

下に目を向けると姫が不安そうな目で見つめてくる。

「どうしたの？」
「あ、えあぅ～その一人だとさびしい…です」
「一部屋でお願いします」

さすがにこのフルフルしているのを見て二部屋でとは言えないし、
する理由もなかった。
いや、あったとしてもかき消えた。

部屋に入るとベッドが一つしかなかった。
枕は二つあるが。

一体なにを考えているのだろうと部屋をかえてもらおうとしたが、姫にとめられた。
これでいいのかな？と思いつつ椅子に姫を座らせコップにジュースをついであげる。
その真向かいに自分は座る。

「そう言えば自己紹介してなかったね、自分の名前は厳島＝森羅、森羅って呼んでくれればいいよ」
「え、あ…はい。わ私は、ヒメリア＝エル＝ヴィンラートといいましゅ…す。ヒメと呼んで下さい？」

噛み噛みで答えて、最後はなぜか？で終わっている。

「そんなに自分の事が怖いかい？」

まあそりゃ怖いだろうと森羅は思う。
どんな軍隊が来ても無敵を誇っていたお父さん（魔王）をいとも簡単に倒してしまったのだから。
しかし、予想に反した答えが返ってくる。

「い、いえ、ち違います。だって…シンラ様は、お父様を助けてくれたし、お父様が悪い事をしていたのは事実だし、私にも手荒なことし、しないし……」

徐々に声が小さくなっていく。

「手荒な事なんてしないよ。ヒメが帰りたいのであれば今すぐ帰すし、あ、それと様じゃなくて呼び捨てでいいよ」
「あ、いや…大丈夫です。有り難うございますシ、シンラさん？」
「うん、まあ様よりはましか。」

「所で、ヒメはどこでどんな事をしたい？自分に出来る事だったら何でもするよ？」

ヒメは少しうつむいて考えると口を開いた。

「わ、私……」

～ヒメサイド～

ここは、何処なのだろう。

私が生まれた１３年前にはもう戦争が始まっていて危ないからという理由で城から出た事なかったし、出ないのだから外の事も聞こうともしなかった。

そして、抱えあげられたのも初めてだった。

なんか、顔が赤くなるし、まともに思考が働かない。

そんな私に気付いて勇者様は地面に下ろしてくれる。

「あぅうぅ～」

なんかへんな声が出てしまう。

ものすごく恥ずかしいです。

「大丈夫？」

勇者様が声をかけてくる。

とても優しそうな笑顔をしているわ。

待って下さ今立ちます、少しだけ…。

勇者様は待ってくれました。
ゆっくり立とうとしていると手をかしてくれる。
そのまま手をつないで歩きだす。

「ようこそ、セリアノーズへようこ…そ?……魔、まま魔ぞヒッ！！」

門の所に立っていた人間が顔を青くする。
やっぱり私たちは恐れられているのね。
あれ、だけどこの人間私を見ていないような…。

上を見るとお父様並に怖い勇者様がいた。
でも、かばってくれているのが分かるので私としては怖くない。
むしろお父様を見ているようでおちつくし、うれしい…。

そこから一番近い家に入りました。
あ、宿だったみたいです。

「二部屋でお願「え！」…ん？」
「どうしたの？」
「あ、えあぅ～その一人だとさびしい…です」

一人はさびしいし、なにより怖いのです。
勇者様と一緒にいれば大丈夫そうです。

「一部屋でお願いします」

一緒にいてくれるみたいです。
優しいです。

部屋に入るとベッドが一つしかありませんでした。
でも私はいつもメイドの方と一緒に寝ていたのでとなりに誰かいないと眠れません。
勇者様が部屋を変えようとしていたところをとめました、恥ずかしいけれど…勇者様なら大丈夫な気がします。

椅子に座るとジュースをついでくれました。
私の前に勇者様は座ると私の顔をみてさらに笑顔になりました。
なんか顔についてるのかな。

「そう言えば自己紹介してなかったね、自分の名前は厳島＝森羅、森羅って呼んでくれればいいよ」

勇者様はシンラ様でした。
私も名前をいわなくては…。

「え、あ…はい。わ私は、ヒメリア＝エル＝ヴィンラートといいましゅ…す。ヒメと呼んで下さい？」

噛みました。
というかヒメでいいのでしょうか。

「そんなに自分の事が怖いかい？」

そんな事ありません。
どんな軍隊が来ても無敵を誇っていたお父さんを簡単に倒してしま

ったのはすごいですが。
私に優しくしてくれるし…。

「い、いえ、ち違います。だって…シンラ様は、お父様を助けてくれたし、お父様が悪い事をしていたのは事実だし、私にも手荒なことし、しないし……」

なんか恥ずかしいです。

「手荒な事なんてしないよ。ヒメが帰りたいのであれば今すぐ帰すし、あ、それと様じゃなくて呼び捨てでいいよ」

さすがに呼び捨てには、出来ません。
それに、せっかく城から出たのです。
もう少し色々見てみたいです。

「あ、いや…大丈夫です。有り難うございますシ、シンラさん?」
「うん、まあ様よりはましか。」

「所で、ヒメはどこでどんな事をしたい?自分に出来る事だったら何でもするよ?」

うれしいです。
でも、どこでもと言われても城の外にどんな物があるのか分からない。
シンラさんは私の事を好きらしいですが、私はまだ好きとか言うのはよく分かりません。
少なくともシンラさんのことは、嫌いではありませんが。
もっとシンラさんの事をしりたいし、色々な物もみてみたいです。

「わ、私、シンラさんが今まで見て来た物を見てみたいです」

■■■■■■■■■■■■■■■

シンラがそれにうなずくとパァアアと顔を明るくするヒメ。
とりあえず明日はシンラが見て来た物でここから一番近い（という
かある意味これを見せるためにここに来たシンラであった）希望の
岬を見に行く事にした。

しばらく話していると薄暗くなってきた。
もちろんこの世界には電球などの物はない。
油で灯すランプか魔法による明りしかない。
もちろんシンラはどちらも出来る事だったがヒメが眠そうにコクン
コクンしているので、今日の所は寝る事にする。

で、眠れるわけがない。
今自分はヒメに半分抱き枕的な感じにされている。
ヒメにとっては、お兄さんと寝ている感覚なのだろうが、自分にと
っては好きな人と同じ布団で寝ているのだ。
すぐ隣にはヒメのかわいい寝顔がある。
もし異世界に自分を送ったのが神様なのなら、神様、こっちに来て
から一番きつい試練です。
うん、まあ我慢しましたよ。
強制単体催眠魔法（スリープ）を自分自身にかけて眠りに就く。

ヘタレと言うがいいさ。

第二話「添い寝と強制単体催眠魔法（スリープ）」（後書き）

なんか、会話文が少ない…。
と言うか全体的に変なような…。
これが初心者のさだめか…。

第三話「あわれなチンピラ共と広域殲滅雷撃魔法（サンダーストーム）」

空が少しずつ明るくなっていくこの時間。
まだ起きている人は少ないだろう。
証拠に窓から見える大道には警備のための自警団が、一人真面目に見回りをしているだけであった。

少し早目に目が覚めた自分ことシンラは、目を開けるといきなりヒメがいて文字通りドッキリとした。

「そおぃ！！」

バシャァァァァァ…と机の上においてあった魔法陣によって、よく冷やされた水を頭からかぶり、雑念を吹き飛ばす。

水も滴るなんとやら。

しばらく特にやる事はないので、椅子に座りながら自分の愛刀『黒刀』を磨いた。
『黒刀』と呼ぶだけあって、その刀身は真っ黒である。
おおよそ勇者が持つ物には見えない。
まず『剣』でなく『刀』と言うじてんでおかしいのだが…。

まあ、その分強いんですよ。
恐怖を通り越して笑える位に。
例をあげると地面に置くだけで、刃の部分全て刺さってしまう。
もっと果てし無く長ければ、『ストラール』つまり世界を真っ二つにしてしまいかねない。
特殊効果もＨＰ常時回復、ＭＰ常時回復、毒無効、麻痺無効、即死

無効、敵の弱点属性付与、物理攻撃無効、魔法攻撃無効…ｅｔｃ…。
装備するだけで無敵になれる。
まあ『黒刀』はシンラ自身が一か月ほどかかりっきりで作ったもので、力を入れすぎたため装備可能レベルが２５０となり、シンラでもギリギリになってしまった。
もちろん他の人が装備するどころか、持つ事も出来ない。

外が朝のにぎわいを醸し出してきた。
もう少ししたら部屋に朝ご飯が運ばれて来るので、それまでにヒメを起こしておく事にする。

「ヒメちゃん、ヒメちゃん、朝だよ」

軽くゆすると、「む～～～～」という可愛い声を出しながら伸びをするヒメになごみながら、もうすぐ朝ご飯が運ばれて来る事をつたえる。

「は、はい…わかりました～」

まだおねむなようで、目を手でコスリコスリしているのがなんとも言えない。

さらに、顔を洗ってきたヒメがタオル「タオル何処ですか～～～」と目をつぶってヨタヨタと歩いてくるので、自分の今までの不条理な戦いに明け暮れた日々は、これを見るための代償だったとしたら許せるな～となごんだ後、すぐにタオルで顔をふいてあげる。

「むぁ…一人でふけますよ～」

と言っているが可愛いのでそのまま拭いていると、ドアをノックする音が聞こえた。
ドアを開けると、次々に料理が運ばれて来る。

「それでは、ごゆっくり」

運んできた従業員は部屋を出ていった。

ヒメと向かい合わせに座り、「いただきます」と両手を合わせた自分に、それはなにをしているんですか？と聞いてきたヒメに、これは料理を作った人や食材に感謝の気持ちを伝えるための物なんだよ。と、教えると…。

「い、いただきます」

それを聞くと、ヒメも納得したかのように両手を合わせて同じ事をする。

しばらくして、食事を終えた自分は凄く驚いたようなヒメに話かける。

「ヒメちゃん、さっきから驚いているようだけどどうしたの？」

あ、そういえばいつの間にか話しかけるときの呼び方がヒメちゃんになってる、と思いながらきくと…。

「はい、その…今まで食べて事がないくらい美味しくて…」

「そう？」

まあ、確かに美味しいけどヒメもお姫様なんだからもっと美味しい物食べてるんじゃないのかな？と疑問に思う。

「ヒメちゃんは何時もどんな物食べてたの？」

「え…え～と……に、人間です」

今なんかとんでもない事聞いたような…あ、でも駄目だ、なんかヒメが食べたい言うたら自分取ってくるかもしれん。

普通の食べ物の方が美味しいみたいでよかった。

自分殺人鬼になっちゃうよ。

「あ、あの…驚きましたよね…」

うん、驚きました。自分がするかもしれない行動に…。

「驚きましたよね、怖いですよね…」

ウルウルした目で見てくるって…ちょっなんで泣きそうなの！？

「大丈夫だよ？ヒメちゃんの事怖がるはずないじゃないか。確かに驚いたけどそれは、ヒメちゃんが食べたいって言ったら取ってきそうな自分にたいしてだよ」

「そ、そうだったんですか…あ、ありがとうございます…」

■■■■■■■■■■■■■■■

うん、なんだかんだあったけど、ただいま自分はヒメと買い物に来ています。

なにしろ急な事だったので（自分のせいです）着替えなどを持ってきていないヒメのために色々買おう！と言う事で来たセリアノーズ中心街。

「あの、服屋さんじゃなくていいんですか？」

首をかしげるヒメに大丈夫だよ。と答える。

「『クラフトスキル』色々持ってるからね」

「あの…シンラさん『クラフトスキル』ってなんですか？」

「…知らないの？」

「す…すいません。知らないです…」

ウルっときていたので、あわてて大丈夫だよ教えてあげるから、ね？と頭をなでなでしながら落ち着かせる。

というかめっさサラサラなんですけど。

「え～と、まず『魔術』もしくは、『魔法』は知ってるよね？」

「はい。お父様はそれがとても強かったから恐れられていたんですよね？」

「まあそうだね。で次に特技ってしってる？」

「えっと、はい知ってます。シンラさんがお父様の魔法とかを切って、消したりしていたときに技として使っていたものですよね？たしか次元…「じゃあ次いくね」…はい」

やめて～自分は中二病なんかじゃないんだ。

でも声に出さないと技発動しないんだよ。

「そして、『クラフトスキル』は、魔法にも特技にも分類されない。まあ、逆にどちらともとれるかもしれないけどね」

「どういう事ですか？」
「大まかに言うと、材料があればそれから作れる物だったら力量次第でいくらでもつくれるんだ。瞬時に作れるという点では魔法みたいだし、魔力も使う。作ろうと思えばクラフトスキルなしでも作る事ができる。それは、つきつめれば特技と言える。武器で強力なのを作ったりするのは、その人個人の特技だからね、そんな感じの能力なんだ」
「わかりました。つまり、シンラさんが私の服作ってくれるんですね！」
「ああ、可愛いヒメちゃんに似合う可愛い服を作ってあげるからね」
「か、可愛い…って…あ、ありがとうございます」

またしたも赤くなってるヒメ。いやあ本当に可愛いな。

「ところ、でヒメちゃんはどんな色が好き？」
「黒が好きです」
「自分と同じか」
「はい、同じです」

自分のきている物を見ると、黒率９０パーセント以上である。
残りは銀で紋章のような模様が書いてあるだけだ。
それと比べるとヒメの服はまだ白のフリフリがある分黒率は少ないが、それでも８０パーセント以上は黒い。

と、言う訳で黒い布を中心に買ったわけだが…。

「シンラさんどうかしましたか？」
「ん？いや、なんでもないよ。それよりあそこでおかし売ってるから買っておいで？」

シンラは銅貨を１０枚ほど渡す。

「はい、いってきます！」

と元気な声で嬉しそうに走っていくヒメ。

「さて…」

～チンピラサイド～

物陰からこっそりと黒い服を着た男と、歳の若い魔族を見ているチンピラ達がいた。

「おい、あそこにいるの魔族じゃねぇか！」

「なんでこんな所にいるんだ？」

「しるか！」

「でもなんか可愛いな」

「ゲッお前そういう趣味かよ…」

お酒も少し入っていたため気持ちの高ぶっていた。

何処にでもいそうなチンピラ３人組みだった。

「俺たちで捕まえないか？」

「お前はしたいだけだろ」

「まあな」

「だが賞金ももらえるぜ？」

実際はもうそのような事はないのだがまだ、魔族との戦争が終わったという情報が伝わるには相当な時間がかかる。

「お？優男が離れたぞ！」

「運が向いてる、行くぞ！！」

剣を構えるリーダーっぽい人。

ナイフを持つ人。

肉弾戦が得意なのか何も持たない人。

魔法を唱えた人？

3人の動きが止まる。金縛りにあったように動けないのだ。

「人の…」

冷や汗をだらだらながしていると、チンピラの前にさっきの優男登場。

「人の嫁に何しようとしてくれとんじゃあああああああぁああああああああああああ！！広域殲滅雷撃魔法（サンダーストーム）ううううおおりやあぁぁあああ！！」

「「「ぎゃあああああああああああああああああああ！！」」」

「まったく、死ねや糞共が…」

～ヒメサイド～
目の前には色とりどりの美味しそうなおかしが並べられていた。
店番をしていたおばさんは魔族のヒメが来た事で最初は驚いたが、このセリアノーズは魔族から一切被害を受けていないので偏見というかなんというか、そういうのが少ない。
さらに、自分の子供と同じ位の子が目をキラキラさせていたので、怖いというより可愛いが先にきていた。

「お嬢ちゃん、どれにするんだい？」
「あ、あの、え～っとこ、これにします！」
「はい、石貨三枚だよ？」
「こ、これで大丈夫ですか？」

シンラにもらった物を渡す。

「あ、お嬢ちゃん三枚で大丈夫だよ？」
「すいません、よくわからなくて…」

今思えば物を自分で買うのは初めてなヒメであった。

「あ、ありがとうございました！」
「いえいえこちらこそ、まいどあり！またきなね？可愛いお嬢ちゃん」
「か…かわ…そ、そういえばおばちゃんは私の事怖くないんですか？」
それに優しく微笑んだおばちゃんは、お嬢ちゃんは怖い事するのかい？と聞いてきた。
「い、いえ…そんな事…」

「じゃあ大丈夫だ。そりゃあ悪い魔族もいるだろうけどお嬢ちゃんはしてないだろ？」
「は…はい」
まあ、ヒメ自身がなにか悪い事したわけではなかった。
人間を食べていたのだって、食卓に出てくるのがそれなのだから仕方がなかったのだ。
「お嬢ちゃんの事悪く言う人もいるだろうけど、色々頑張るんだよ！」
「はい！」
なんかうれしくなってきた。
「じゃこれサービスね！」
そう言っておばちゃんは、小さな飴玉をくれた。
「あ、あとおばちゃんじゃなくお姉さんね！」
「はい！ありがとうございました。お姉さん！」
ヒメはシンラのもとに戻るためかけだした。
そのうしろすがたをおば…お姉さんは「いい子だねぇ…」とほほえましく見ていた。
■■■■■■■■■■■■■
「シンラさ～ん、買ってきました！」
ヒメの手にはカラフルなペロペロキャンディーが握られていた。

「これ甘くて凄く美味しいですよ！シンラさんも少しなめてみますか？」
「い、いや…」
「そうですか、では私が全部食べちゃいますね」

またペロペロハムハムとなめ始めるヒメ。
この時シンラはどれほどなめたいと思った事か…。
でも間接キスならぬ間接ペロペロをするのは、なんかものすごく恥ずかしかった。
まあ見ているだけで幸せになれるからいいか。

二人は手をつなぎながら歩いていく。

「あれ？シンラさん。なんか赤いのがほっぺたに付いてますよ？」
「ん？…ああ、なんでもないよ？どこかでインクでも付いたんだろう」

ちなみに、石貨＝１０円
銅貨＝１００円
銀貨＝１，０００円
金貨＝１０，０００円
精霊貨＝１００，０００円
位の価値です。

第四話「希望の岬と時間停止魔法（ザ・ワールド）」（前書き）

すいません。
更新遅くなりました。

第四話「希望の岬と時間停止魔法（ザ・ワールド）」

希望の岬。
自分がこの世界に来て二番目に綺麗だと思ったものだ。
一番目？なにをいっているのだ、ヒメにきまっているだろう。
第一ヒメの可愛さ美しさにかなうものなどない！！

まあ、そんなわけで、ヒメと比べると見劣りするが、綺麗な景色なわけだ。
何処までも続く海。
夕日が沈むこの瞬間がかなりのベストタイミングだ。

「シンラさん、景色すごくきれいですね！」
「そうだね！でもヒメちゃんの方が綺麗で可愛いよ？」
「そ…そんな事ないですにょ／／／／／／」

か、かわええ～。

とりあえず今は、この素晴らしい時間を満喫する為に、ヒメと自分以外のじかんを魔法、『時間停止魔法（ザ・ワールド）』で止めている。

２０分位たち、魔法を解除すると、時が動き出す。
それでもまだしばらく見ていたので、もうすっかり辺りは暗くなり始めている。
ヒメと宿まで帰ろうと、歩き出そうとした時、魔物がエンカウント

した。
どうもこのストラールで出てくる魔物はドラ〇エよりな気がする。
『スライム』が出てきた。
というか、魔族の影響の少ないセリアノーズ付近ではほとんど『スライム』しか出ない。
見かけは結構可愛いが音がグキュグキュ鳴っているので微妙に気持ちが悪い。
もちろん自分は素手で空を切り、特技の『カマイタチ』を発動させる。
カマイタチが発生して難なく倒す。
しかしヒメはおびえているようであった。

ここで、ストラールのレベルの程度を紹介しよう。
平均の一般成人男性のレベルは１０レベルである。
城の兵士で１５レベル兵士長で２０もあれば十分であろう。
自分の仲間のレレイ、リカード、リネアは、最初会った時５０レベルオーバー。
世界最強クラスであった。

『スライム』クラスの魔物であれば、６、７レベル位で倒すことが出来る。
まあ装備にもよるが、１０レベルになろころには、ダメージもほとんど入らないだろう。
しかし、ヒメは城の外に出た事がない。
つまり、ストラールの絶対条件魔物を倒して（理屈は分からないが）レベルアップをした事がない。

上のレベルからは呪文の『サーチ』で詳しい数値を見る事が出来る。
（同じレベルだと両方見る事が出来る）
さすがはヒメ、能力は高いがそれでもレベル１である。
いくら自分がいるとしても危険だな。
よし、今後少しヒメをレベルアップさせよう。
シンラはひそかに決意するのだった。

じゃあ…装備は…。

宿に戻り、風呂に入り、晩御飯も食べ終わり、あとは寝るまでのんびり過ごすこの時間、シンラはヒメにレベルアップの事を聞いてみる事にした。

「ねえヒメちゃん」
「なんですか？」
「レベルアップしてみない？」
「え…どういう事ですか？」
「いや、さすがにいくら自分がいてもヒメちゃんのレベルだと危ないかなってね」
「それは、わかりますけど…でも…」
「でも？」
「こ、怖いです」

シンラに９９８のダメージ。
瀕死の重傷だ！！
何回も言うがヒメの涙目はかわいすぎる。
まあ実際のＨＰは自分でも文字化けしていて読めません。

最後に確認できたのが、９９９９９９９９９９９９９９９９です。京です。

「大丈夫だよ。自分が完ぺきにサポートするから」
「そ、そうですか…で、では頑張ってみます」
「うん、一緒に頑張ろう、それで装備の事なんだけどこれ着てみてくれない？」

昼間に買った布を『クラフトスキル裁縫＆装飾＆付与』で防具と武器をつくりあげたそれをヒメに渡す。
ちなみに武器は『クラフトスキル鉄鋼＆砥師＆装飾＆付与』で作り上げた。

「え、でもこれ」
「まあ来てみてよ。絶対にあうから」
「…はい／／」

ヒメが服と装備をつける。
え？その間？もちろん目隠ししてたよ？…多分。

まさにパーフェクト！！

「うぅう…／／」

ヒメは恥ずかしそうにミニスカの裾を伸ばしている。
今回の服は動きやすいように、フリルを主としたゴスロリを動きやすいようにしたものである。
胸をスポーツブラにフリルが付いたような物で隠し、お腹はみえている。
スカートはミニスカフリルで、黒と白ではえている。
けしてやましい気持などない。
見るからに動きやすそうではないか！！
ちょ！！変態とかいわないで！！
…武器は細身の長剣で今回は白くしてみた。
なんか聖剣っぽいな。

普通肌が見えていたら防御力が下がりそうであるが、ここでは通用しない。
たしかに、兵士の姿を見てみると、甲冑を着込んでいる。
しかしこれは総じて安く上げようとしているだけだ。
魔法と言う物があるので、力量次第では全裸でも、指輪一つで鋼鉄１００００ミリの強度を持った膜なんかを作ることも可能だ。
まあ、そんなのあったら精霊貨何億枚にもなるだろうが。
え？ヒメに？もちろん三個ほど渡してるよ？
まあ、この世界にはそれでも貫通させる攻撃力や能力を持ったやつもいくらかいるから、けして無敵というわけじゃないけどね。
結局は個人個人が強くなるのが一番いいのだと思う。

「へんじゃないですか？」
「そんなことない。完璧にかわいいよ！！」
「そ、そうですか／／／／」

「ああ、最高だよ！！」
「えへへへ…／／／／」

…夜はふけていく。

ちなみに昨夜と同じに、抱き枕状態になりました。

第五話「未来が気になる自分と時間跳躍呪文（タイムスリップ）」

試練の塔

ヒメｓｉｄｅ

「ここですか？シンラさん」

「うん、そうだよ」

シンラさんの呪文で試練の塔と言う所に来ました。

ここにはすばやくて、なかなか見る事も出来ないメタル系という魔物がいるらしいです。

メタル系の魔物は経験値をたくさん持っていると、シンラさんは教えてくれました。

シンラさんが「ドラクエだよな…」とつぶやいていましたがいまは自分が魔物を倒す事が出来るかどうか、ドキドキなので後で聞く事にしましょう。

「じゃあ、さっそく倒してみようか」

「はい、で、でもどこにいるのですか？」

「目の前にいっぱいいるよ」

見えないです…。

「まあ、速すぎて見えないかもしれないけど適当にふりまわしてれば偶然当たる事もあるから、やってみて。それが一番経験値の入る率が高いから」

「はい」

がんばりますよ～…あ。

「おっと大丈夫？」
「はい／／／／／」

恥ずかしいです。
いきなりこけてしまいました。
あれ、そういえば剣は？

周りを探してみると刺さってました…銀色の頭が尖った丸っこい魔物に。

「や、やりましたよシンラさん」
「おめでとう」

やりました。
！！耳を澄ますとピロリロリーンという音が何回もなっています。
鳴り終わった後にステータスを見たらいきなりレベル１０になっていました。
かなり凄いです。
もう普通の人間の大人と同じ位の強さになりました。
このちょうしで、シンラさんに頼られるくらいになりたいです。

シンラｓｉｄｅ
いやあ驚いた。
いきなりあてるとは！！
これもヒメの日ごろの行いがいいからかな？
攻撃力は剣の効果で上がってるから一撃必殺だしね。

喜んでいるヒメも可愛いな。

「シンラさん私頑張ります！！」
「うん、一緒に頑張ろう」
／／／／／はい」

どのくらい強くなるか気になる人が多いと思うので、時間跳躍をしようと思います。
けして、作者が文才の無さに限界を感じて後数話で終わらせようとしているわけじゃ…ないですよ？
すいません嘘つきました。

「シンラさんどうかしましたか？」
「いや何でもないよ？」

という訳で、シンラは時間跳躍（タイムスリップ）呪文を唱えるのであった。

エピローグ

あれから１０年がたった。
前の冒険以上に色々あった。
元仲間と久しぶりにあったと思ったら、自分とヒメ含めて全員不老不死になったり、真の敵が現れたり（速攻でフルボッコにしました）…まあこの時にはヒメちゃんもなぜか限界突破してレベル１０１になってたから楽勝だったよ。
そして、一番きつかったのが…リネアとレレイにダブルで告白されたことだった。
話し合った結果が……。

白く大きな教会。
ステンドグラスがとても綺麗だ。
その中で結婚式がおこなわれている。

「では誓いの口づけを…」

自分は、目の前にいる三人、リネア、レレイ、ヒメに口づけをする。
そう…結局こうなったのだ。
リカード？後ろの隅で体育座りしてるよ。
あいつリネアの事好きだったからな…。
…ドンマイいい事あるよ。

こうして自分たちは幸せに暮しました。

ハッピーエンドという事で！！

エピローグ（後書き）

ここまで見ていただき本当に有り難うございました。
この次もありましたらよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0034q/

魔王の娘(姫)に惚れた勇者

2011年5月22日17時57分発行